



僕のガレージへ
ようこそ!



WELCOME TO MY GARAGE HOUSE



愛車とともに暮らす ガレージのある家

愛車とは道具ではなく家族。
家族ならば住処を与えたいし、
できることなら一緒に住みたい。
それを叶えてくれるのがガレージハウスだ。

取材協力◎ジェイスタイルガレージ、サイエンスホーム

そもそもガレージとは何?
その成り立ちと現代事情

ガレージと聞くと、我々日本人は車を入れる「車庫」をまず思い浮かべるだろう。もちろんそれは間違いではないが、そもそもガレージの成り立ちを調べると、一概に車庫だけの用途ではなかったようだ。

交通手段の主流が馬や馬車から自動車へと移り始めた頃のアメリカでは、それまでの馬小屋から自動車用のガレージが建てられるようになったが、車を入れるというよりも倉庫として利用されることが多かったそうだ。そして扉が頑丈なガレージは、ガレージバンドという言葉からも分かるように、スタジオなど趣味の場としても使われていた。

そして現在。ここ日本でも、それまでの車庫的扱いから一歩踏み出したガレージが、徐々にではあるが増えてきたようだ。もちろんアメリカと比べると国土が狭い日本では、潤沢な広さのガレージを作るのは現実的ではないが、それでも限られたスペースの中で単純に車を停めるだけではない使い方がなされている活用例を見かけることが多くなった。

今回、取材する中で感じたのは愛車を家族として扱う人たちの車への強い愛情だった。そこでここでは、愛車を中心としてプラスアルファの使い方を実践している人々のガレージハウスを紹介していこう。

PIT + GARAGE

下回りのメンテも楽チン

ピット&リフトのあるガレージ

I邸
(神奈川県)



まるで整備工場のようなガレージ

神奈川県相模原市在住のIさんは、夫婦でAE86(トレノ&レビン)を所有するほどの車好き。そして趣味が講じて2014年4月に新設したガレージには、なんとパンタグラフのようにせり上がるリフトが設置されているというから驚きだ。車の整備工場などではおなじみのリフトだが、なかなかガレージで見かけることはない代物だし、そもそも一般家庭にあること自体がめずらしい。元になったガレージキットはリクシルのスタイルコートで、仕事から帰ってきた時に愛車がすぐに見られるように庭側の全開にできる折戸パネルは透明に、ガレージ奥にはカタログにない換気扇とドアが取り付けられたカスタマイズ仕様のガレージだ。

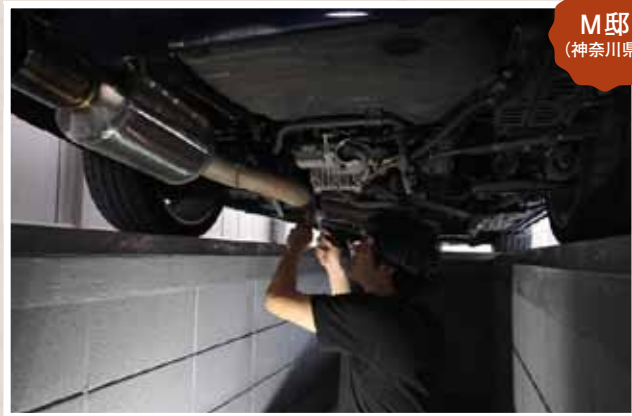


右/夫婦でトレノとレビン、さらに大型バイク2台を所有するほど車&バイク好き。
左/電動シャッターと折戸パネルを開けると、2方向が全開になって開放感たっぷり。

走りを楽しむ車好きは、車の状態にも気を使う。
気持ちよく走るために、日々のメンテナンスは怠らない。
そんな彼らが選んだのが下回りをチェックしやすいガレージだった。

問い合わせ: モーニングガーデン ☎0120-48-0035 <http://www.morning-garden.com>

M邸
(神奈川県)



車の下のピットは車好きの隠れ家

神奈川県横浜市瀬谷区在住のMさんの愛車は日産スカイラインR33型GT-R。その愛車のために今年4月に自宅の敷地内に新設したのが、車の下に潜り込めるピット付きのガレージだ。GT-Rといえば走り好きの代名詞。Mさんも当然走り好きだが、ちょっとしたメンテナンスならば自分で簡単にやっつけてのけるだけの知識も持っているようで、せっかくガレージを新設するのなら下回りのメンテがしやすいピットがあれば、とオプションで発注したのだという。もともと兄弟揃っての車好きで、1970年型フェアレディZを所有する弟さんも休みのたびに遊びに来ては、このガレージで1日の大半を一緒に過ごしているようだ。



右/住宅街にある自宅の雰囲気にもマッチした外観。左/リクシルのスタイルコートにピットをオプションで追加。普段はピットに落ちないように蓋をしている。